



ヒバクシャ地球一周 証言の航海
Global Voyage for a Nuclear-Free World
Peace Boat Hibakusha Project

PEACE
BOAT

〒 169-0075
東京都新宿区高田馬場
3-13-1-B1
TEL: 03-3363-7561
FAX: 03-3363-7562
<http://www.peaceboat.org>

2014.06.25

第7回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」 プロジェクトの概要とその成果

- クルーズ 第83回ピースボート「地球一周の船旅」
- テーマ 「ヒバクシャとユースが共に作る未来」
- 期間 2014年3月13日(木)～2014年6月24日(火)
- 寄港地数 18カ国 20寄港地
- 使用客船 オーシャンドリーム号
- 参加被爆者 8名(内訳:広島被爆6名 長崎被爆2名)
参加被爆者は「非核特使」に委嘱
広島被爆: 服部道子、李鐘根、坂田尚也、坂下紀子、杉野信子、中村元子
長崎被爆: 三瀬清一郎、計屋道夫
- ユース参加者 2名(内訳:高知県出身1名 広島県出身1名)
参加ユースは「ユース非核特使」に委嘱
浜田あゆみ、福岡奈織
- 証言・交流活動 12カ国14都市にて実施
- プロジェクト通称 おりづるプロジェクト
- 主な活動と成果

活動:

- ①被爆証言会を被爆者とユースが共同で企画し、実践した。戦争体験の継承における若者の役割に関する議論を深めた。
 - ・ 被爆者とユースが役割分担して、被爆者の声が聞き手に届きやすいように工夫しながら被爆証言会を企画(ユースによる証言原稿づくりの手伝いや資料選び、被爆証言の前後にユースが企画したワークショップの実施など)。
 - ・ 船旅参加の若者らとともに、詩、歌、演劇、写真展、被爆体験の聞き取り、証言朗読、スピーチ、ファッションショーなど、新たな形の継承活動に取り組んだ。
 - ・ アウシュヴィッツ強制収容所を訪問し、ホロコースト生還者・地元学生らとの交流からアウシュヴィッツと広島・長崎の継承のあり方を比較、議論。
 - ・ イスラエルやパレスチナからの学生(部分乗船)や、ベネズエラの若手政府職員などと、戦争体験の継承について意見交換。
- ②核兵器の非人道性を訴え、核兵器禁止条約の交渉開始を多くの政府に要請した。
 - ・ NPT再検討会議準備会合にあわせて、アメリカの市民団体「ヒバクシャ・ストーリーズ」(キャスリン・サリバン主宰)と協力し、国連本部やニューヨークの高校で被爆証言会を実施。
 - ・ 核兵器禁止条約の促進に取り組む平和首長会議への加盟を促進。関連都市に原爆ポスターの寄贈等。
 - ・ ベネズエラにて、大統領をはじめ政府高官らと面会。核兵器廃絶と禁止条約締結への努力を要請。

成果:

- ・ 若者が参加し、演劇や音楽などを用いた被爆・戦争体験の継承の新しい形の可能性を示した。
- ・ ベネズエラ大統領との面会などを通じて、核兵器禁止条約に向けた国際的機運を高めた。
- ・ 平和首長会議 新規加盟都市:コトル市(モンテネグロ)、モトリル市(スペイン)
- ・ 原爆ポスター等の寄贈先については7ページ参照。

●参加被爆者略歴



服部 道子(はっとり みちこ)

広島被爆 1929年3月10日生まれ 被爆当時16歳 埼玉県蕨市在住
戦時中、軍医部で看護業務に従事。被爆当日は、爆心地より3.5kmの地点で被爆し気を失うが、日本兵に叩き起こされ防空壕に逃げ込む。その後、三日三晩飲まず食わずで、火傷を負った人々の手当治療、死体処理に奮闘した。戦後は、広島を出て国内を転々とするが、原爆病や差別に悩まされ、辛い時期が続く。1985年より証言活動を開始。毎年、学校などで原爆の実相を伝えている。



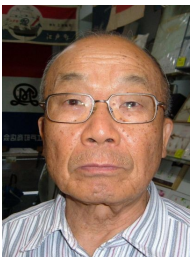
李 鐘根(い じょんぐん)

広島被爆 1929年8月15日生まれ 被爆当時15歳 広島県広島市在住
在日韓国人二世。日韓併合の後、父親が日本に移り住んだ。当時、日本国有鉄道に勤務しており通勤途中に被爆。首や足に大やけどを負い身体にうじが湧くなどの被害を受けた。2012年春の第5回ピースボート「証言の航海」への参加をきっかけに証言活動を開始。アメリカ平和団体の取り組み「ヒバクシャ・ストーリーズ」に招かれニューヨークで高校生らに被爆経験を語る等、活動の幅を広げている。



坂田 尚也(さかた たかなり)

広島被爆 1930年3月18日生まれ 被爆当時15歳 広島県三次市在住
旧制中学に在学中、爆心地から3km地点にある動員先の三菱重工の造船工場にて被爆。気を失い、気づくと窓ガラスの破片が腹や腕に突き刺さっていた。翌日、中心部にて大やけどを負った人の行列や川から流れてくる黒こげの遺体など、地獄絵図を見た。戦後も様々な病気に苦しむ。現在は、証言活動に尽力する一方で、まちづくり支援のNPOを立ち上げるなど地域活性化に取り組んでいる。



三瀬 清一郎(みせ せいいちろう)

長崎被爆 1935年2月26日生まれ 被爆当時10歳 長崎県長崎市在住
爆心地より3.6km地点にある自宅にて、オルガンを弾いて遊んでいるときに被爆。とっさに目と耳を両手でふさぎ、うつ伏せになったところで強烈な爆風に襲われる。幸運にも家族全員無事だった。2003年より、年に20回以上、ボランティアガイドとして修学旅行生を対象に被爆遺構巡りを案内している。特に戦後世代の若者へ平和の尊さや命の大切さなどを伝えることを重視している。



計屋 道夫(はかりや みちお)

長崎被爆 1937年5月6日生まれ 被爆当時8歳 長崎県長崎市在住
爆心地から3.8kmの自宅にて強烈な閃光と爆風を経験し近くの防空壕へ避難。軽度の被爆で事なきを得た。戦後、高校教員として36年間教鞭をとる。2009年秋の第2回ピースボート「証言の航海」への参加をきっかけに証言活動を開始。帰国後は、長崎平和推進協会の継承部会員として国内での活動に取り組むほか、自身の手配により東南アジアを中心に海外の若者らへ核の被害の実相を伝える活動に尽力。



坂下 紀子(さかした のりこ)

広島被爆 1943年6月22日生まれ 被爆当時2歳 埼玉県所沢市在住
爆心地から1.4km地点の自宅にて被爆。強烈な爆風で数メートル飛ばされ、落ちてきた柱の釘で額を切る等の被害を受けた。その後、火の海の中を家族で避難している最中に黒い雨を浴びる。これまで積極的に証言活動を行ってこなかったが、昨夏、県遺族代表として6日の平和記念式典に出席したことをきっかけに、母の辛い記憶を伝えていきたいと少しずつ証言の機会を増やしている。



杉野 信子(すぎの のぶこ)

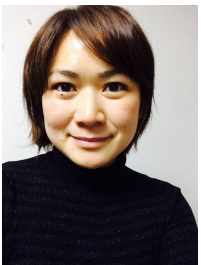
広島被爆 1944年1月18日生まれ 被爆当時1歳 東京都世田谷区在住
爆心地から1.3km地点の自宅にて被爆。母親と自身は家屋の下敷きになったが隣人に助けられ無事だった。爆心地近くで学徒動員として作業していた兄は爆死。火傷がひどかった姉も被爆20日後に他界した。若年被爆者で記憶はないが、都内の被爆者の会に所属し証言会の手伝い等を通して被爆証言の聞き取りを行っていた。2012年、母親の記憶をもとに自身の証言を開始。



中村 元子(なかむら もとこ)

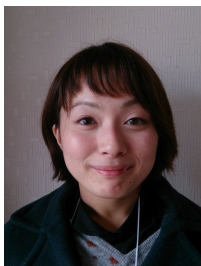
広島被爆 1944年9月5日生まれ 被爆当時11ヶ月 広島県安芸郡在住
爆心地から2.3km地点の自宅にて被爆。中学生の頃、被爆時に母親が行方不明の家族を捜すため自身を背負い市内を歩き回ったという話を聞き、放射能被害を意識するようになる。現在も、長女が甲状腺の病に苦しむなど世代を超えた影響に不安を抱いている。これまで証言経験は少ないが、2011年に広島市の要請を受け国連本部へ核兵器廃絶の要請書を提出する等、活動の幅を広げている。

●参加ユース略歴



浜田 あゆみ(はまだ あゆみ)

高知県の町出身 1985年11月1日生まれ 現在28歳
高校卒業まで高知で育つ。高校卒業後、カナダに留学。ビクトリア大学の芸術学部演劇科に入学・卒業。現在は役者としての活動の傍ら、バックパッキングで世界を旅する。
小学校6年生の修学旅行で広島を訪れ、初めて被爆証言を聞いた。カナダでは、ホストマザーの実母が被爆者で、被爆体験をもとに歌集を出版していた。原爆記念日に合わせてビクトリアで行われた灯籠流しの際には、この歌集を朗読した。大学4年時の2008年には、教授に掛け合い井上ひさし作「父と暮せば」の公演を授業の一環として行った。この劇の制作にあたっては、プロデューサー、役者(娘役)、セットデザイナー、コスチュームデザイナーを担当し、180人以上の観客を動員。同年夏には、毎年カナダで行われるFRINGEフェスティバル(演劇祭)でもこの劇を上演した。



福岡 奈織(ふくおか なお)

広島県広島市出身 1992年12月8日生まれ 現在21歳
祖父が被爆者。2011年に広島大学総合科学部入学。被爆証言の継承をテーマに積極的に活動してきた。小中学校の頃から授業の一環として被爆証言を聞く機会があり、広島や長崎の歴史について学んだ。高校時代には、市民団体「広島と長崎をつなげるプロジェクト」のリーダーとして活動。また、研修旅行でマーシャル諸島共和国に一週間滞在し、現地住民との交流の中で核実験の被害について学んだ。
2013年6月には有志の大学生・社会人グループ「Team 青麦」に所属し、漫画「はだしのゲン」40周年記念イベントの運営・企画を行った。同年8月には広島・東京・石巻で同時開催された8.6 One Night というイベントに携わり、被爆証言を後世に伝える活動に取り組んだ。

●寄港地での活動

3月20日 ムアラ(ブルネイ)

活動都市:ツトン

ブルネイ王国の初代首相ペンギラン・ユスフ氏の自宅を訪ね、交流・意見交換を行った。ユスフ氏は、1944年に当時の国費留学生制度であった南方特別留学生として来日し、1945年8月、広島文理大学(現・広島大学)在学時に広島市内で被爆した。今年93歳を迎えるユスフ氏に被爆当時の様子を伺うことはできなかったが、交流を通して少しずつ日本語や当時の記憶を思い出していく様子が感慨深く、アジアと日本の歴史と関係を考える機会となった。

ペンギラン・ユスフ氏▶
(ブルネイにて、3月20日)



3月23日 シンガポール

活動都市:シンガポール

発言者:李鐘根さん、服部道子さん、浜田あゆみさん/約70名

血債の塔や国立博物館の訪問を通して日本軍の統治下に置かれたシンガポールの歴史を学んだうえ、国立図書館委員会(National library board)にて被爆証言・グループディスカッションを実施。証言会では、ユースが被爆証言の一部を演劇を通して伝えるなど新たな試みを行った。ほか、シンガポールで記憶と歴史の伝承活動に尽力する日本人女性との交流を通して、戦争や歴史を多角的に見る視点や若い世代への継承の具体的な実践例を学ぶ機会となった。

3月28日 コロンボ(スリランカ)

活動都市:コロンボ

発言者:坂田尚也さん、福岡奈織さん/約30名

南アジア全体の安全保障の研究や提言を行っている団体、地域戦略研究センター(RCSS)の受け入れのもと学術研究者や安全保障の専門家に証言会を実施。証言会ではスリランカ出身の元国連事務次長、ジャヤンタ・ダナパラ・パグウオッシュ会議議長が司会を務め、核廃絶への機運が高まるいま、あらためて被爆者の声に耳を傾ける意義を語った。質疑応答では、現在の日本の核政策や原発の是非などについて問われた。

4月9日~10日 アカバ(ヨルダン)

活動都市:アンマン

【グループ1: パレスチナ難民キャンプでの証言会】発言者:杉野信子さん/約30名

【グループ2: 国会議員らと面会】発言者:服部道子さん、坂田尚也さん、計屋道夫さん/約30名

2つのグループに分かれて活動を行った。グループ1は、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)受け入れのもと、首都アンマンにあるヨルダンのパレスチナ難民キャンプを訪問。シリア難民の状況について学ぶとともに、証言・意見交換会を実施。難民一世の方が「私たちの苦しみは誰にも分からない。いつか私たちの本当の家に帰れる日が来ることを待ち望んでいる」と語り代々受け継いでいる家の鍵と土地の権利書を見せてくれたことがとても印象的だった。一方、グループ2では国会議事堂を訪問。約20名の国会議員と面会し、主に原発の是非に関して意見交換を行った。被爆者の世代を超えた放射能の被害に関する話に熱心に耳を傾けたうえ、現在の福島第一原発の状況や今後の動向について質問や意見が活発に飛び交った。

4月19日 コトル(モンテネグロ)

活動都市:コトル

発言者:三瀬清一朗さん、浜田あゆみさん(記者会見/約30名)、杉野信子さん(イベント/約30名)

コトル市役所受け入れのもと記者会見・被爆証言会を実施。被爆当日の状況や、差別(就職、結婚)、町の復興、戦後の暮らし、被爆後の心の拠り所など、様々な質問がなされ有意義な会見となった。会の終わりには副市長がその場で平和首長会議の加盟書に署名したことで会場が一体となった。夜には、船内で行われた「武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ」(GPPAC)主催のピースイベントに参加。英語での被爆証言ののちユース2名が詩の朗読とヴァイオリンでパフォーマンスを行うと、会場から大きな拍手が送られた。

4月24日 モトリル(スペイン)

活動都市:モトリル

発言者: 李鐘根さん(約20名)

モトリル市役所を訪問し、ルイサ・マリア・ガルシア市長と面会。その場で平和首長会議の加盟書に署名を頂いた。市は毎年チェルノブイリ原発事故で被曝した子どもたちの保養プロジェクトを行っており、市長をはじめ参加した職員みな被爆証言に熱心に耳を傾けていた。来春ピースボートを受け入れる際は市の主催で被爆証言会を実施しようという市長の提案に、次につながる訪問となった。

5月7日～8日 ラグアイラ(ベネズエラ)

活動都市:カラカス、ラグアイラ

発言者: 服部道子さん(記者会見/約50名)、坂田尚也さん・坂下紀子さん・福岡奈織さん(証言会/約300名)三瀬清一郎さん(友好と平和のフェスティバル/約700名)

ベネズエラ外務省受け入れのもと様々なイベントに参加し、核なき世界へのメッセージを届けた。7日、船内で行われた記者会見では州知事や副大臣らに面会しラテンアメリカにおける非核地帯強化への期待を表明。同日ラグアイラで実施した地元中学校での被爆証言会や平和と友好のフェスティバルでは、多くの市民が参加し被爆者の声に熱心に耳を傾ける様子に、核廃絶に対する意識の高さを感じた。

翌8日には、カラカス市内でマドゥーロ大統領に面会し、直接に核廃絶への取り組みを申し入れを行った。大統領からは「ヒロシマ・ナガサキで皆さんが被った悲劇を、人類は決して繰り返すべきではない。中東で核戦争の危機が高まる中、ベネズエラはチャベス大統領のときから国是としている世界平和の実現への過程として、核兵器廃絶と核兵器禁止条約実現に向けて最大限の努力をしていきたい」と力強く返答。この面会の様子は、多数のメディアを通じて中南米全土に放送された。



▲マドゥーロ大統領と面会(カラカスにて、5月8日)

5月19日 カヤオ(ペルー)

活動都市:リマ

発言者: 李鐘根さん、中村元子さん、福岡奈織さん/約30名

カトリカ大学民主主義・人権研究所の受け入れのもと証言会を実施。在日韓国人2世である李さんから「原爆の被害にあったのは日本人だけではないと言うことを知って欲しい」と語られると会場が興味深く聞き入っている様子が感じられた。質疑応答では、アメリカ、日本両政府による被爆者への補償の現状や、原爆投下について国際社会がどのように認識しているかなどの質問が多く、核の使用を非人道的な事実として捉えている様子が伺えた。偶然、会場にアウシュヴィッツ生還者がいて、互いの痛みを共有する貴重な機会となった。

5月25日 イースター島(チリ)

活動都市:イースター島

発言者: 計屋道夫さん、福岡奈織さん、浜田あゆみさん/参加人数:約100名

市の受け入れのもと、島の体育館で子どもたち(5歳～18歳ほど)に向けて証言会を実施。被爆者による証言の前に、ユースより「原爆は何か知ってますか？」など対話形式で原爆について説明を加え、証言後には会場の子どもたちと詩の朗読をするなど工夫。被爆者のメッセージがより心に残るための新たな証言会の形を模索し実践できた。広島・長崎を訪れたことがあるという市長の「原発をふくめ核による脅威におびえることのない平和な世界を築いていきましょう」というメッセージが印象的だった。

6月2日 パペーテ(タヒチ)

活動都市:ファアア

発言者: 三瀬清一郎さん、福岡奈織さん、浜田あゆみさん/参加人数:約40名

現地住民団体「モルロアと私たち」受け入れのもと、仏核実験の被害者らと交流し、被爆者の経験を若い世代に伝えていくための課題について意見交換を行った。日本側の被爆証言で、プログラムに参加した船内の若者らと協力のもと、原爆ポスターや詩の朗読などを通じ被害の実相を伝えている様子に「被爆者と若者が連帯して歴史を語り継ぐ一つのモデルを見た」とのコメントをもらった。また、ファアア市を中心に計画されている、核実験の記憶を記録・保存するためのメモリアル建設への賛同・協力の意を伝えた。

6月12日 ホノルル(ハワイ)

活動都市:ホノルル

アリゾナ記念館を訪問し、真珠湾攻撃について学ぶとともに太平洋戦争や原爆投下の事実について多角的に捉える機会となった。プログラム中に交流したアメリカ出身の若者から「日本への原爆投下により数百万規模の犠牲を食い止めることが出来たのでは」という意見に原爆に対する認識の違いを感じた。一方で、インドネシア出身の留学生から「日本とインドネシアも過去に悲惨な歴史を抱えているが、いまは経済的・文化的に交流がある。今後も平和的に連帯していきたい」と語られ、過去の歴史に向き合ったうえで、若者らを中心に未来を築いていく可能性が感じられた。

【特別プログラム】

●アウシュヴィッツ特別欧州プログラム

4月14日～18日 オシフィエンチム(ポーランド)

活動都市:オシフィエンチム

発言者:坂下紀子さん、福岡奈織さん/参加人数:約40名

歴史教育のあり方や戦争体験の継承の方法を学ぶため、アウシュヴィッツ強制収容所を訪問。唯一の日本人公認ガイドである中谷剛さんより、博物館の展示の仕方や次世代への継承の取り組みについて伺った。

また、ホロコースト生還者や地元学生らとの証言交流会を通し、当時の社会状況や被害の実相を学ぶと共に、現在の学校教育の実情や課題について意見交換が行われた。オシフィエンチムで生まれ育った若者から「私たちが生まれ育ったこの町を“アウシュヴィッツ”という視点だけで見ないで欲しい。今を生きながら、過去を語り継いでいくことが重要だと思う」と語られたことが印象的だった。



▲日本人公認ガイド、中谷剛さんと
(オシフィエンチムにて、2014年4月17日)

●ニューヨーク特別プログラム

4月26日～5月6日 ニューヨーク(アメリカ合衆国)

活動都市:ニューヨーク

発言者:計屋道夫さん、杉野信子さん



▲国連本部(ニューヨークにて、2014年4月30日)

NPT再検討会議準備会合(2014年4月28日～5月10日)にあわせ、被爆者2名が一時本船を離脱し渡米。アメリカの市民団体「ヒバクシャ・ストーリーズ」の活動に合流し、ニューヨークの高校や国連での証言活動を行った。より若者に被爆の実相が伝わるように、証言の前後でワークショップや対話を行うなど証言会のつくりかたについても学ぶ機会となった。

30日、国連関係者に向けた証言会では、被爆当時の様子を想像し涙を流す参加者も多く、互いに平和を築くプロセスを考え捉え直す場となった。

【その他の寄港地】

クシャダス(トルコ)/ミコノス島(ギリシャ)/ピレウス(ギリシャ)/バーリ(イタリア)/ドブロブニク(クロアチア)/ジブラルタル/カサブランカ(モロッコ)/クリストバル(パナマ)/ボラボラ島(タヒチ)

●平和首長会議の原爆ポスターならびに広島市市長、長崎市市長からのレター届け先

1. ブルネイ(訪問日:3月20日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: なし
 - 広島市、長崎市市長レター: ペンギラン・ユスフ氏(ブルネイ初代首相)
2. シンガポール(訪問日:3月23日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: リー・クワン・ブーン氏(シンガポール国際連合協会副会長)
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上
3. スリランカ(訪問日:3月28日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: 地域戦略研究センター(RCSS)(コロンボ)
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上、ならびにジャヤンタ・ダナパラ・パグウオッシュ氏(元国連事務次長)
4. ヨルダン(訪問日:4月9日～10日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: 国会議員
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上
5. ポーランド(訪問日:4月14日～18日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: なし
 - 広島市、長崎市市長レター: 対話と祈りのセンター(オシフィエンチム)
6. モンテネグロ(訪問日:4月19日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: コトル市
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上
7. スペイン(訪問日:4月24日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: モトリル市
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上
8. ベネズエラ(訪問日:5月7日～8日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: ベネズエラ政府(マドゥーロ大統領ならびに政府関係者)
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上
9. ペルー(訪問日:5月19日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: カトリカ大学 民主主義・人権研究所(リマ)
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上
10. イースター島(チリ)(訪問日:5月25日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: イースター島市
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上
11. タヒチ(訪問日:6月2日)
 - 平和首長会議原爆ポスター: ファアア市
 - 広島市、長崎市市長レター: 同上ならびに市民団体「モルロア・エ・タトゥ」

●メディア掲載情報(一例)

1)2014年3月24日掲載

The Straits Times "Atomic bomb survivors share stories"(シンガポール)

MONDAY, MARCH 24, 2014 THE STRAITS TIMES

Atomic bomb survivors share stories

RED and yellow flashes lit up the morning sky, followed by an ear-shattering bang.

It was Aug 6, 1945, the day an atomic bomb was dropped on the Japanese city of Hiroshima, and Ms Michiko Hattori was then a 16-year-old nurse who had just started work at a military hospital.

"It was a living hell from that day onwards," said the 85-year-old, who later developed lung cancer. One of her granddaughters was also born with a hip deformity, causing her to walk with a waddle.

Ms Hattori was one of eight atomic bomb survivors who came to Singapore yesterday to share their stories and call for a world without nuclear arms.

About 100 people, from local Japanese to history buffs, crowded the top floor of the National Library Board building to hear first-hand accounts of the hibakusha, or atomic bomb survivors of the Hiroshima and Nagasaki explosions.

Mr Akira Kawasaki of Japanese non-governmental organisation Peace Boat, which organised the event, said they have been getting the survivors to tell their stories since 2008.

"The average age of hibakusha is now over 78 years and



Ms Michiko Hattori, 85, is among eight atomic bomb survivors who shared their stories at the National Library building yesterday. She was 16 when the bomb was dropped on Hiroshima in 1945. ST PHOTO: DESMOND LIM

the time left to hear it from their own mouths is limited," said Mr Kawasaki.

There are about 220,000 hibakusha alive today. These include not only people injured by the blast, but also those exposed to radiation by "black rain".

The uranium atomic bomb in Hiroshima killed 140,000; a plutonium bomb dropped on Nagasaki killed 74,000.

Ms Hattori recalled the surreal sight of people with their

eyes popping out and skin hanging loose. Some had the pattern of their kimono seared into their skin.

The plight of babies also haunts her. She recounted how a mother handed over her newborn, only to realise the baby was headless. Another tried to breastfeed her baby, but failed because the young one did not recognise her heavily scarred mother and refused milk.

Another survivor, Mr Jongkeun Lee, 86, a second-genera-

tion Korean living in Japan, also shared how the burnt wounds on his neck gave him much distress when they became infested with maggots.

These sobering accounts left a deep mark on many in the audience. Student Tan Yu Jia, 17, asked Ms Hattori: "Why is it so difficult for countries to destroy their nuclear weapons?"

She replied with a wan smile: "That's the question I ask myself every single day."

JANICE TAI

2) 2014年4月20日掲載

Al-Jazeera "'Brod mira' u luci Kotor"(モンテネグロ)



Opozicione koalicije

Koliko su bile uspješne i kakve promjene mogu donijeti koalicije opozicionih stranaka, kao što je nedavno osnovani Savez za promjene u RS-u

1 2 3 4 5

VIJESTI EKONOMIJA TEME MIŠLJENJA BLOG SPORT VIDEO PROGRAMI PRENOS UŽIVO VRIJEME

Potražite na Al Jazeere Pretraga

Video 'Brod mira' u luci Kotor

20 april 2014, Nedelja 18:40 CEST

Tweet 9 Share 0

Japanski "Brod mira" sa blizu 900 putnika posjetio je crnogorsku luku Kotor na tromjesečnom putovanju oko svijeta. Organizator ovog projekta je nevladina organizacija iz Japana koja promovise mirovno obrazovanje i sprečavanje konfliktata. Među učesnicima projekta su i ljudi koji su preživjeli eksplozije atomskih bombi u Hirošimi i Nagasakiju prije 70 godina. Poručuju da se tako nešto više nikada ne smije dogoditi.



Kotor Crna Gora Brod mira

NAPOMENA: Komentari odražavaju stavove autora komentara, a ne stavove Al Jazeere Balkans. Molimo korisnike da se suzdrže od vrijeđanja, psovanja i vulgarnog izražavanja jer takvi komentari neće biti objavljeni. Al Jazeera Balkans zadržava pravo da određene komentare obriše bez najave i objašnjenja.

●船内での活動(企画一覧)

1. 原爆の被害の実相を伝え理解を深める

- 証言会 :「一緒に証言会をつくろう！」(3/16)
証言会 :「16歳の少女が見た原爆 服部道子の証言」(3/19)
証言会 :「マリオ・ゴメスさん(スリランカの人権活動家)と証言・意見交換会」(3/25)
勉強会 :「みんな知ってる？原爆と原発」(3/26)
証言会 :「福島の中学生へ被爆証言会」(3/27)
映画上映 :「おりづるシネマ ～フラッシュ・オブ・ホープ～」(3/31)
勉強会 :「ぶっちゃけ企画！原爆ってなあに？」(4/1)
映画上映 :「おりづるシネマ ～広島・長崎に関する映画～」(4/4)
証言会 :「10歳の証言が見た原爆と戦後」(4/6)
証言会 :「記憶のない被爆者の記憶」(4/7)
証言会 :「李鐘根さんの被爆証言会」(4/29)
証言会 :「はっちゃんの本当の話① 戦前の話」(4/30)
証言会 :「はっちゃんの本当の話② 戦時中の生活の話」(5/1)
証言会 :「はっちゃんの本当の話③ 被爆当日の話」(5/4)
証言会 :「ベネズエラ青少年オーケストラ『エル・システム』の若者へ被爆証言会」(5/6)
証言会 :「ベネズエラ政府高官へ被爆証言会」(5/9)
証言会 :「ジョン・パーキンスさん(エコノミスト)へ被爆証言会」(5/10)
証言会 :「母の記憶 娘の想い」(5/13)
座談会 :「もっちゃんと話そう ～放射能、被爆2世の話～」(5/13)
証言会 :「ポール・ディー・ミラーさん(アメリカ出身DJ)へ被爆証言会」(5/21)
証言会 :「戦争が何か知っていますか？」(5/23)
映画上映 :「おりづるシネマ ～広島・長崎に関する映画・再上映～」(5/23)
証言会 :「ポール・ディー・ミラーさん、マーク・ワイスさん、エンリケ・イカ・テヒへさんへ被爆証言会」(5/24)
証言会 :「はっちゃんの本当の話④ 被爆当日の話のつづき」(5/24)
証言会 :「ミュージカル『コモンビート』に出演する若者ら104名へ証言会」(5/28)
証言 :「ポール・ディー・ミラーさんによる証言ビデオ撮影」(5/28)
証言 :「ポール・ディー・ミラーさんによる証言ビデオ撮影」(5/29)
映画上映 :「おりづるシネマ特別編 ～はだしのゲンが見たヒロシマ～」(6/4)

2. 戦争体験の継承について理解を深める

- 交流会 :「おりづるひろば ～仲良くなろう～」(3/14)
交流会 :「ヒバクシャと話そう！」(3/15)
交流会 :「おりづるひろば ～紙芝居で知ろう ピカドンの話」(3/18)
交流会 :「おりづるひろば ～一緒に企画をつくろう～」(3/25)
交流会 :「おりづるひろば ～一緒に企画をつくろう～」(3/27)
交流会 :「おりづるひろば ～みんなで考える原爆の話～」(3/30)
交流会 :「おりづるひろば ～みんなで考える原爆の話～」(3/31)
講座 :「戦争の記憶を語り継ぐには」(4/5)
歌練習 :「はだしのゲンの歌をうたおう」(5/1)
歌練習 :「はだしのゲンの歌をうたおう」(5/3)
ワークショップ :「はだしのゲンのメッセージ」(5/4)
歌練習 :「はだしのゲンの歌をうたおう」(5/4)
対談 :「戦争を語り継ぐ～演劇を通して～」(5/14)
ワークショップ :「おじぞうさんの見た世界～絵本『おこりじぞう』を通して～」(5/30)
座談会 :「戦時中の記憶を語る～真珠湾からリンゴの唄まで～」(5/31)
映画上映 :「おりづるシネマ ～ヒバクシャとボクの旅～」(6/6)
講座 :「消えたナガサキ もう一つの『原爆ドーム』」(6/7)
パネルディスカッション:「被爆証言は被爆者にしか語れないの？」(6/7)

3. 原発を含めた核や平和の問題について理解を深める

- 講座 : 「世界の核は今」(3/16)
勉強会 : 「教えて！川崎さん～いま知りたい核のこと～」(3/17)
講座 : 「どうする憲法9条！～改正？護憲？無関心？～」(3/21)
パネルディスカッション: 「日本って嫌われてるの？」(3/21)
講座 : 「日本とマレー半島の歴史を見つめる」(3/22)
映画上映 : 「宇井孝司さんと共同企画 『ゼノ かぎりなき愛に』上映」(3/24)
発表会 : 「朗読劇 『音楽神話 ささやきの物語』」(3/26)
報告会 : 「ユース発！広島での平和活動報告」(4/2)
講座 : 「ホロコーストと核」(4/3)
勉強会 : 「若者の学びの場 戦争のことを知ろう」(4/3)
ワークショップ : 「平和ってなあに？」(4/5)
勉強会 : 「みんな知ってる？アウシュヴィッツ」(4/13)
勉強会 : 「若者の学びの場 戦争のことを知ろう2 ～靖国問題～」(4/28)
勉強会 : 「チェルノブイリを見つめて」(5/3)
勉強会 : 「若者の学びの場～図書館～」(5/10)
パネルディスカッション: 「今だから一緒に考えよう 放射能と食べ物」(5/14)
講座 : 「私の生きたタヒチ 楽園の裏側～太平洋で行われた核実験～」(5/29)
パネルディスカッション: 「テラコヤ45歳編: みんなで考える 核と人権と環境」(5/30)
講座 : 「『ブラボー』～隠されたビキニ事件の真実～」(6/9)
展示 : 「第五福竜丸パネル展」(6/9)
講座 : 「ビキニ水爆実験から60年を迎えて」(6/10)
展示 : 「第五福竜丸パネル展」(6/10)
講座 : 「核時代を生きるということ」(6/14)

4. プロジェクトの意義や成果を一般参加者と共有する

- 講座 : 「はばたけ！おりづるプロジェクト」(3/14)
報告会 : 「おりづる証言報告会 inアジア！」(4/2)
報告会 : 「僕の証言活動の記録」(4/4)
発表会 : 「瀕死のコトバ おりづる発表会」(4/7)
報告会 : 「アウシュヴィッツ報告会」(4/23)
講座 : 「おりづるプロジェクトってなあに？」(4/28)
報告会 : 「被爆者が見たアウシュヴィッツ」(4/30)
歌発表 : 「文化祭 はだしのゲンの歌発表」(5/6)
報告会 : 「寄港地活動報告会～ニューヨーク・ベネズエラ編～」(5/15)
発表会 : 「舞台 『過去からのメッセージ』」(5/24)
交流会 : 「おりづるプロジェクトに興味がある人集まろう！」(5/27)
発表会 : 「DJスプーキーの挑戦」(5/30)
発表会 : 「私たちが伝える、被爆者のおはなし」(6/17)
発表会 : 「今を生きるあなたへ ～ファッションショー～」(6/18)
発表会 : 「舞台 『智恵子の空』」(6/19)
報告会 : 「ニュース83 おりづる記者会見～最後の報告会～」(6/20)

●詳細

ホームページ <http://www.peaceboat.org/projects/hibakusha/>

ブログ <http://ameblo.jp/hibakushaglobal/>

